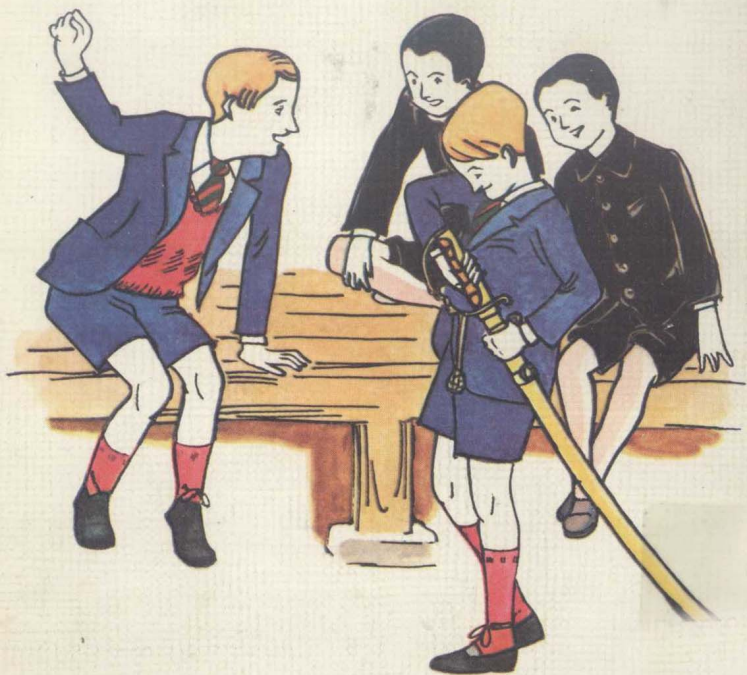


トム君・サム君

佐々木 邦





少年倶楽部文庫30

トム君・サム君

昭和51年4月16日 第1刷発行

著 者 佐々木 邦

発行者 野間 省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112 振替 東京8-3930

電話 東京(03)945-1111(大代表)

編 集 株式会社 第一出版センター

印 刷 図書印刷株式会社

製 本 株式会社 国宝社

Printed in Japan ©佐々木孝雄 1976

落丁・乱丁の際はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。 (セ)

少年倶楽部文庫

30

トム君・サム君

佐々木 邦



講談社

◎ 目次 ◎

絵の手紙	七
日本の紳士	九
国境なし	一〇
進め！パン！	一七
塀の上から	一八
仲直り	二五
議論家アングル・ジョン	二七
東京見物	二九
日米交歓	一〇四

サムライ日グイ

置き土産おもみ

送別会

二六

二三

二五

挿絵 装幀

河野光雅
目野光雅
二

トム君・サム君



絵の手紙

安井君と本間君は隣りどうしだ。庭が低い生垣で仕切つてある。二人はそれをいいことにして、表へまわる面倒を見ない。生垣をまたいで、行ったり来たりする。秋の夕方だった。本間君が安井君の方へ遊びに来て、ボールをやっていた。

「くたびれた」

「休もう」

二人は自然に一致して、芝生の上へ寝ころんだ。

「雲が動いている」

「うむ」

「こうやって見てみると、ナカナカ早いものだ

なあ」

「すこし紅いね。夕焼けだ」

「明日もいい天気だろう」

「やあ。赤トンボが飛んでいる」

「たくさんいる。空いっぱいだ」

「今来たんだよ。今まで気がつかなかったもの」

「たいへんだね。これが飛行機だったら、どうだろう？」

「東京を攻めに來たんだ。爆弾を落とされたら全滅だぜ」

二人は寝ころんだまま、空を見つめていた。

秋の空は殊に高い。じっと眺めていると、心持ちが大きくなる。そういうことを先生から教わった。

「おい。冗談するなよ」

と、まもなく安井君が頭を持ちあげた。

「なんだい？」

「ボールを打つつけたろう？」

「知らないよ」

「嘘ついていらあ。今、僕の鼻先でバウンドしたよ。もうすこしであたるところだった」

「僕はほんとうに知らないよ。しかしそういえば、今なんだか音がしたね」

と、本間君が起きなおったとたん、天からボールがふって来て、額でバウンドした。

「痛い」

「どうした？」

「ボールが来た」

「どこへ？」

「あそこだ」

本間君は庭木の根元へ追って行って、拾って見た。自分たちのボールではなかった。

「違うぜ、これは」

「見せたまえ。違うね」

と、安井君は手に取ってあらためた。

「僕は君のところの健ちゃんのいたずらかしらと思ったけれど」

「健ちゃんは歯が痛くて寝ているよ」

「それじゃこれはコロンブスの発見だ」

といって、本間君は庭のはての塀の方を見かえた。

「何がコロンブスの発見だい？」

「塀のむこうの家へ人が越して来たんだ。その家に子供がいるから、このボールが流れて来たんだ」

「なるほど」

「もう一つは？」

「あすこでバウンドしたんだから」

と、安井君は、それを見つけ出すに困難がなかった。

二人はボールを一つずつ手にして、塀の方へ進んだ。耳をかたむけたら、声が聞こえた。

「何かいっている」

「聞こえるけれど、わからない」

「大人だよ、これは」

「笑っている」

「子供じゃないようだ。ここから来たのかしら？」

「ほかに来るところはないよ」

「とにかく、返してやろう」

「うむ」

「一、二、三！」

二つのボールは塀のむこうの持ち主の手に戻った。それはやっぱり同じ年頃の少年二人で、広い庭に遊んでいた。

「おい。トム、またやろう」

「うむ。こんどは僕も脳天のうてんへ打つつける」

「だめだよ、君は」

「それじゃかけをしようか？ サム」

「よし。頭へあてたものは十銭と」

「オール・ライト」

と、二人はアメリカ人だ。英語で話していた。人の頭へボールをあてて、かけをしようというのだから、ひととおりならぬいたずらっ子とみえた。トムが兄にいさんで、サムが弟おとうとだ。しかし双子だから、同い年で、顔形から丈の高さまで寸分さうぶん違わない。どっちがどっちだか、見わけがつかないくらい似ている。

トム君とサム君は塀にのぼり始めた。猿のように身が軽い。二人は安井君の家の庭をのぞき込んだ。安井君と本間君はそんなこととは知らず、またボールをやっていた。トム君とサム君はめいめい安井君と本間君を目がけて、ボールを投げつけるが早く、頭を引っ込めた。

「おやおや」

「また来たぜ」

「僕の胸にあたったよ」

「僕はもうすこしでまた頭へあたるところだった」

「これは打ったんだよ」

「失敬なやつだな」

と、二人は塀の方をにらんだ。

しかし、二人のボールが入って来た場合、返さないわけには行かない。二人は、

「やい。気をつけろ！」

「こんど入ると取りあげてしまうぞ」

と叫んで、投げ返してやった。

「厄介なやつが越して来たね」

「うむ。これは喧嘩になるかもしれないよ」

「喧嘩をしかけているんだ」

「不良だろう、きつと」

「よくないやつにきまっている」

「のぼってみようか？」

「いけないよ。喧嘩を買うことになる」

「しかし、売るものなら買わなければならぬよ。だまっていると癖になる」

と、本間君は、すでに頭へあてられていたか

ら、この上の出ようしないで堪忍しないつもりだった。

塀のむこうでは、

「怒った」

「もうよそう」

「こっちは友だちになるつもりだけれど」

「わからないんだよ」

「親切がわからない」

「わからせる法はなかるうか？」

「ある」

「どうする？」

「手紙をやるう」

「日本語が書けない」

「絵を描く」

「それがいい」

トム君は紙を持ってきて、四人の子供が手をつないでいるところを聞いた。そのうち二人は鼻が高かった。二人は目がつりあがっていた。

アメリカ人と日本人をかきわけたつもりだった。それにボールをつつんで、こんどはごくゆるやかに、安井君の庭へ投げ込んだ。

「おい。また来た」

「紙につつんでよこしたよ」

と、こっちの二人は、こんどは取りあげるつもりで待っていた。

「なんだろう？　これは」

「絵のつもりだろう」

「絵のつもりは可哀^{かわ}そうだ。子供が四人で手をつないでいる」

「はてな」

「君のいうとおり、あんまり上手な絵^{じょうず}じゃないね」

「丙^{ひで}だよ」

「ばかに鼻が高い」

「目がつりあがっている」

「とにかく、これは喧嘩^{けんか}じゃない。和睦^{わく}だよ。

手をつないでいるんだから」

「わかった。遊ぼうという意味だよ」

「そうだろう」

「返事を出そう」

安井君は鉛筆を持って来て、その絵の余白^{よはく}に、

「遊ぶなら仲よく遊ぼう。変なことはしないでくれたまえ」

と書いて、ボールもろとも投げ返した。

返事は手に入った。

「なんだろう？」

「わからない」

「コックさんに読んでもらおう」

「それがいい」

と、トム君とサム君は家へ入った。

「遊ぶなら仲よく遊ぼう。変なことはしないでくれたまえ」

と、コックさんが読んでくれた。二人は日本で

生まれたのだから、日本語はほとんど完全に出来る。ただ字が読めないばかりだ。

安井君と本間君はどういう返事がくるかと思つて、急に興味をもよおした。しかし油断^{ゆだん}をさせて、またボールを打^うつつけるのかも知れないと考えたから、用心して塀の方を見守つていた。するとまず手が現われた。それからニュッと顔が現われた。

「ハッハハハハ」

と笑つて、すぐ引込んだ。おやおや、西洋人だと思つたせつな、別のところからまた同じ顔が現われて、

「ハッハハハハ」

と、同じ声で笑つて、すぐに引込んだ。

安井君と本間君はびっくりした。

「ハッハハハハ」

と、次の瞬間に、同じ顔が二つ塀の上にならんだ。こんどは引込まない。

「ハッハハハハ。おめでとうございます」といった。

「ハッハハハハ」

と、安井君と本間君も笑つた。

「仲よく遊びましょう」

「変なことはもうしませんよ」

と、二つの同じ顔が、しきりにうなずいた。

「仲よく遊びましょう」

と、こつちの二人も、やっぱり好意を示した。

「行きましょうか？」

「来たまえ」

「飛びおりますよ」

「あぶないですよ」

「大丈夫」

と、トム君とサム君は身を躍^{はな}らして、塀からこつちへ飛びおりた。サム君の方はよろめいて、芝生^{しば}に手をついた。本間君がたすけ起こしてやった。サム君はそのまま本間君の手を握つてふ

りながら、

「お目にかかってうれしいです」

といった。トム君も安井君と握手をしていた。

ついでに四人手をつないで、さっきの絵のとおりになった。

「僕、トマス・ペンネットです」

「僕、サムエル・ペンネットです」

「僕、安井忠夫です」

「僕、本間一はじめです」

と、四人は自己紹介をした。

「僕たち、兄弟きょうだいです。こいつ、よろしく」

「こいつ、よろしく。僕たち、兄弟です」

と、トム君とサム君は、お互いの関係を教えたつもりだった。

「僕、年は今月で十一と三分の一」

「僕も十一と三分の一です」

「僕たちは仲がいいんで、評判ひやうばんです」

「それですから、ほかの人とも喧嘩は決してし

ません」

「友だちが出来て、うれしいです」

「うれしいです」

「ラッ、ラッ、ラララララ」

「ラッ、ラッ、ラララララ」

と、二人はたちまちそのへんをはねまわった。

安井君と本間君はどっちがトム君で、どっちがサム君だかわからなくなってしまった。

「似ているなあ」

「瓜うり二つだよ」

と、安井君と本間君は首をかしげた。二人はそれとさとして、

「僕、トム」

「僕、サム」

「まじってしまったでしょう？」

「わからないでしょう？」

といった。

「瓜二つですから」

「豆二つですよ」

「ははあ」

「玉子二つですよ」

「なるほど」

「まじってしまふと、素人にはわかりません。母ばかりです。父もときどき間違えます」

「これはおもしろい」

と、安井君が手をたたいた。本間君も手をたたいて笑った。

「ラッ、ラッ、ラララララ」

と、二人はまた踊り出して、まじってしまつた。

あまりにぎやかだったので、安井君のお母さんが縁側へ出て来た。いつの間にか庭に西洋の子供が二人涌いていたものだから、びっくりしたようだった。安井君が駆けて行って、事情を説明した。

「あらまあ！ 塀を越しておいになったの？」

らんぼうね」

「お母さま、らんぼうはいたしません」

「お母さま、仲よく遊びます」

と、トム君とサム君が、ていねいにおじきをした。お母さんはそれが氣にいったようだった。

「どうぞごゆっくり」と会釈をして、奥へ入った。

四人は芝生にすわって話しはじめた。

「いつ越して来たんですか？」

と、安井君が訊いた。

「一週間前です」

と、トム君が答えた。

「どこから？」

「築地から。僕たちは築地で生まれたんですから、アメリカ人でも、江戸っ子ですよ」

「えらい言葉を知っているんですね」

「日本語ではどこへいってもほめられます。ペラボウめ、何いってやがるんでえ。このとおり

です」

「ハッハハハハ」

「どてっ腹へ風穴をあけて鰹節を入れるぞう。喧嘩の時はこういつてやります」

と、サム君も負けない気になって、日本語の知識を発表した。

「とてもえらいよ、これは」

と、本間君が感心した。

「日本人のとおりだ」

「日本で生まれて日本で育ったんですから、日本が大好きです」

と、トム君は必ずしも

